

## C-7 人物列伝

### 333. アイルランガ王

ジャワ王朝史において最も英邁<sup>えいまい</sup>な王として知られるのがクディリ王国4代目のアイルランガ(Airlangga)王(1001?-1049 在位 1019-42)である。王はバリ島のウダヤナ王(→264)とクディリ朝の王女の間生まれ、子供の頃にジャワに送られてクディリ王国のダルマワンサ王に可愛がられて女婿になった。アイルランガとは「水を超える」という意味であり、バリ島から出てジャワ島の王になることを暗示している。

ダルマワンサ王は叛乱による不慮の死に際し16歳のアイルランガに後事を託した。アイルランガ王は僧院や森林に身を隠して再起の機会を待った。マハーバーラタのパンダワー族(→948)に課せられた試練になぞらえられる。4年後、一旦途絶えたクディリ王国はアイルランガ王により再建される。

1030年代にかけてアイルランガ王は外征を行い、クディリ王国の威光はジャワ島外に拡大する。国際交易は盛んとなり、宮廷の文化活動は栄え、ジャワは繁栄と栄光の時代であった。アイルランガ王はジャワ人から敬愛されているが、クディリ朝の篡奪者<sup>せんだつ</sup>という異見もあることも紹介しておく。

王国の発展により文化面においてもそれまでの《インド文化》のコピーから《ジャワ文化》が形成された。ラーマヤナやマハーバーラタというインドの叙事詩のジャワ語への翻訳とジャワ化が行われたのはこの頃である。王の愛する詩人ムプ・カンワはアルジュナ・ウィワハ(→906)を作り、ジャワ島の美しい自然を描いた。

出身地のバリ島ではアイルランガ王にちなむ伝説がある。ランダ神話(→955)の一つに魔女チャロナランはアイルランガ王の母であるという。バリ人はアイルランガ王を敬っているにもかかわらず、何故その王の母が魔女なのであろうか。英傑の母は異能の人ということで、バリ人は魔女ランダを畏れているのだろうか。

広大な領土を統一し、繁栄に導いた希代の英雄アイルランガ王も退く時がやってきた。アイルランガ王は



アイルランガ像  
2007/5/18 編者撮影

1049年に世を去る前に王国を分割し、パンジャル王国(王都ダハ・現クディリ)は正室の王子が継ぐ。ジャンガラ(Janggala)王国(王都カフリパン)はバリ出身の側室の子に継がせた。

王国の分割はインド神話マハーバーラタの親族が敵対し憎悪する悲劇を実地でいくものとなった。賢明といわれたアイルランガ王の謎の行為である。

霊廟のベラハン寺院(→146)沐浴場跡の中央に据えられていたアイルランガ像は取り外してオランダのライデン大学博物館へ持って行かれた。その後インドネシアに返還され、現在はトロワン博物館(→142)に展示されている。

⇒245.クディリ王国

### 334. ケン・アンロック王

ジャワ王朝における異色の傑物はケン・アンロック(Ken Angrok)王である。彼の出自もよく分からず、捨て子と伝えられる。街道で追いはぎなど悪事をつくっていたが、このような男が誰かに匿ってもらったのは人に

取り入る才に長けており、何より美男子であつたらしい。母が神と契ってできた子という伝説もある。

ケン・アンロックが偉大なる王になることを見抜いた高僧は彼を連れてトゥマペル(Tumapel)へ来た際に公園で領主のアムトゥン(Ametung)王とケンデデス(Kendedes)王妃に遭遇した。王妃が車から降りる際に“子宮からの光”をケン・アンロックは見た。胎内から発する光を見た者は彼女と結婚し王となる運命であると僧に告げられ、ケン・アンロックは彼女に一目惚れした。

ところで美女ケンデデスはブラフマナ(僧職階級)というヒンドゥー教では最高位のカースト、即ち、領主より高いカーストに属していた。ヒンドゥー教の規範では身分の高い女性は下のカーストの男性と結婚してはならない、もし結婚すれば女の一族は恥をかくことになる。

領主と結婚のため娘の家出によって恥辱を受けたケンデデスの父親は領主が死ぬように呪っていた。そこへ現われたのが娘と領主に並々ならぬ関心を持つケン・アンロックである。娘の父親は領主への復讐のためケン・アンロックを利用した。煽られた彼は領主を殺してケンデデスを自分の妻にし、トゥマペルの領主となった。1222年に宗主国のクディリ王国をもガントウル(Genter)の戦いで破り、ジャワの王になった。

トゥマペルの地名はシンガサリと改名され、シンガサリ王国の所在地となった。同王国はインド文化がジャワ化される完成時期にあたる。今日もシンガサリ近郊には仏教とヒンドゥー教の混合した寺院遺跡に富んでいる。

ケン・アンロック王がケンデデスと結婚して生まれたアヌサパティ(Anusapati)を自分の子として育てたが、実は先の領主アムトゥン王の子であった。成人した王子は自分の出生の秘密を知り、1227年、義父のケン・アンロック王を殺し、王国の2代目を継いだ。

シンガサリ王国は妻の前夫の子と自分の子の子孫同士が殺し合い、70年の短期間に5人の王が血生臭い事件によって入れ替わった。ケン・アンロックの興した王国は鍛冶屋によって呪われた王朝(→702)であることが宿命付けられていた。

1997年春、東京国立博物館で開催された「インドネシア古代王国の至宝展」の目玉はシンガサリ出土の般若波蜜多菩薩座像の展示(常時はジャカルタ国立博物館の二階)であった。乳房を露にした石造の女神は、高さ120cmと小柄である。しかし高貴な顔立の魅入る美しい像がケンデデス妃であるという伝説も頷かれた。

この像を見てケンデデス妃こそがケン・アンロックを唆して夫を殺させたのでないかと思うのは像の幻想が掻き立てる文学の世界である。

⇒246.シンガサリ王国

### 335. ガジャ・マダ宰相

“怒った象”という意味のジャワの英傑ガジャ・マダ(Gajah Mada ?-1364)は生誕から神秘に包まれている。バリ人という伝説もある。仮面によれば高い額、大きな鼻と口、長い耳、額の中央には第三の目があつた。その生涯は魔力を持った異能の人として神話化している。

歴史ではマジャパヒト王国2代目のジャヤナガラ王の親衛隊長として反乱を鎮圧して頭角を現す。ジャヤナガラ王に妻を取られるという屈辱に耐えたという説もある。1331年、ラージャパトニ王妃によってガジャ・マダは30歳にして宰相に任命<sup>1</sup>された。その後、死ぬまで34年間にわたり宰相の要職にありマジャパヒト三代の王に仕えた。

<sup>1</sup> ガジャ・マダ宰相が権力を支配するようになった背景には王室の弱体化があろう。マジャパヒト王国の2代目、3代目の選出には骨肉の争いがあり、ガジャ・マダがうまく裁き宰相になったのではなかろうか。

最初に宰相に任命される際にガジャ・マダは「私はすべての群島を服従させるまではパラパ(Palapa)をしない」と誓った。当時の群島とはセラム島からパレンバンにいたる 10 の島であったらしい。何れにせよジャワの勢力が近辺の島々に及ぶという意味で今日の島嶼国家としてのインドネシアの原型である。

このガジャ・マダの誓いは“パラパの誓い”として名高い。ところで肝心のパラパとは何かは明らかでない。香料、封地、休暇、密教の儀式などの諸説がある。今日ではパラパの名はインドネシアの通信衛星(→545)に命名されている。



ガジャマダ

ガジャ・マダはある年代までは果敢な武人であった。しかし 60 歳になるとマダカリプラ(→143)の領地に引きこもり、神秘力を持つ瞑想家のイメージが強くなる。これはガジャ・マダに限らずジャワの英雄に共通する人物像である。彼の死はモクサ(moksa)である。モクサとは輪廻のしがらみを解脱する超越者のみになしうる忽然と消える死に方である。

彼のクリス(→702)や仮面は魔力を持つものとして今日も崇められている。スカルノ大統領は自らをガジャ・マダの生まれ変わりとして信じていたという。スカルノが失脚した時、ガジャ・マダ由来のクリスはいずこかへ消え失せ現在は行方不明と伝えられる。

群島統一事業の実施者としてガジャ・マダはジャワ人に崇拜される。独立後のインドネシアではジャカルタを始めジャワ各地でマジヤパヒトの名は栄光の証として「通り」や「建物」「広場」あるいは「大学」の命名に使用



ハヤムウルク王

されている。例えばジャカルタのタムリン通(→160)につながる運河を挟んで並行する〈ハヤム・ウルク通〉と〈ガジャマダ通〉はマジヤパイト最盛期のハヤム・ウルク王とガジャマダ大臣である。ジョグジャのガジャマダ大学(→120)は屈指の名門である。

しかしジャワ人以外にしてみればガジャ・マダは征服者にすぎない。例えばスンダ人はパジャジャラン王国のシリワング王が謀殺(→260)された故事を銘記しており、ガジャ・マダは卑劣な権謀家として敬遠されている。クボ・ヒワというバリ島の勇者はガジャ・マダの騙しうちにあつて死んだというバリの説話がある。ガジャ・マダはジャワへの蒙古襲来に動員された中国人であるとも囁かれている。

⇒248.マジヤパヒトの栄光



ヤン・ピーターセン・クーン

### 336. クーン総督

オランダ東インド会社 VOC(→272)のバタビア総督とは会社から全権委任を受けた掠奪の首領であり、戦闘指揮者であり、統治者であった。歴代総督の中の第一人者はヤン・ピーターセン・クーン(Jan Pietersz Coen 1587-1629)であろう。彼は東インドへの航海時にオランダ総督ボット(Pieter Both)に見いだされてその腹心として出世した。

17世紀になって当初の香料貿易の支配していたポルトガル、スペインの勢力は衰えつつあり、代わって勃興してきたオランダと英国が鐮を削って

いた。その焦点は集散地のバタビアと生産地の香料諸島であった。

1618年・1619年のバタビアのオランダ商館は英国とバンテン王国(→261)の連合軍に包囲されたが、オランダ商館は防衛に成功した。この時の功績によってクーンはオランダ東インド会社の第4代総督(1619-23)に就任した。

香料貿易の独占をはかるため、総督はバンダ島(→232)住民はVOCに非協力という口実で全員を処分して他所から移民奴隷を移住させた。いくら有能であってもさすがの悪辣さに会社は彼を罷免した。1623年香料貿易の中継地のアンボンで起きた英国とオランダが衝突したアンボン事件(→273)の謀略の際には、彼は既に罷免されていたが、彼の薫陶をえた部下の仕業である。アンボン事件を契機に英国はアンボンから撤退し、以降はオランダが香料貿易独占するようになったが、英国のオランダに対する憎悪はラッフルズ(→338)にまで引き継がれていた。

その後、バタビアではジャワの新興のマタラム王国が台頭し、スルタン・アグン王(→337)の脅威に対抗するためクーンは総督に再任(1627年)された。1628年・1629年の二度にわたるマタラム王国の20万人によるバタビア包囲もわずか5百人の兵でかろうじて退けた。弾薬はつきてジャワ兵に糞尿をかけて防戦した。ジャワ兵が疫病で倒れたから細菌戦の先駆者であろう。彼もその直後にコレラに罹病して42歳で死んだ。常軌を超えた飲酒癖が伝えられている。

VOCはバタビア・マカッサル・アンボンという拠点を確認し、その拠点を梃にオランダ領東インド(→279)の広大な植民地に発展した。クーンはその最大の功労者である。東インド総督としてクーンのパーソナリティの強さは「怠け者の経営者が最大の敵である」という手紙を本国の経営陣に送りつけるほどであった。

「貿易は武力の保護があって始めて得られる。武力はまた貿易の利益によって支持される。それゆえに貿易は戦争なくしては存在しえず、戦争は貿易なくして存在しえない」という彼の言は帝国主義者の真髓を表している。

太平洋戦争後、日本軍に抑留されていたオランダ人は解放されたものの、彼らを待ち受けていたのはインドネシア人の白眼であった。鬱積したオランダ人が祖国から待望のオランダ兵を迎えた際に『ヤンチェ!』と熱狂的に歓迎した。ヤンチェとはヤーン・ピータセン・クーンのことでヤンの愛称である。  
⇒274.バタビア商館

### 337. スルタン・アグン王



サルタン・アグン

マタラム王家の3代目スルタン・アグン(Sultan Agung 在位 1613-46)は本名マス・ランサンであるが“偉大なる王”スルタン・アグン<sup>2</sup>の称号で知られる。彼の治世の間はマタラム王国の最盛期であり、1625年スラバヤ、トゥバン、マドゥラ島を征服しスフナン(Susuhunan)を名乗った。スフナンはジャワ語で“皇帝”の意味である。

スルタン・アグンは1628年、1629年の二度にわたりオランダ東インド会社のバタビア城を大軍で包囲したが、クーン総督(→336)は必死に防戦し、包囲軍に疫病が流行したため撤退を余儀なくされた。内陸の農業国家のマタ

<sup>2</sup> アグン(agung)は“偉大な”とか“高貴な”という意味である。バリ島のアグン山の命名の由来である。

ラム王国は海軍を軽視していたため船舶による補給がオランダに切断されたことが撤退の要因である。

以降、スルタン・アグンは中部ジャワ、東部ジャワの征服に方向転換し版図は全ジャワ島に拡大した。南スマトラ、南カリマンタンにも影響力を及ぼし、マジヤパヒト王国以来分裂していたジャワ島は再び統一され、新興マタラム王国の最も充実した時であった。

スルタン・アグンは後一步でオランダを海へ追い落とそうとするだけの覇気を持っていた王らしい王であった。一方、度重なる遠征のため国力を消耗させ、征服地に対する厳しい処罰のため西部ジャワや東部ジャワでは VOC に救援を求めたことも事実である。

覇権を確立した王はジャワの正統なる王権の授受者であるスフナンに加え、メッカに使節を派遣して称号を得てスルタン・アグン(大スルタンの意味)と名乗った。スルタン<sup>3</sup>であることによって世俗上のみならず宗教上の最高位者であることから王権のためイスラム教を利用した。

ちなみにスルタンという称号は中東のイスラム権威者から授与される。そのためには然るべき貢物が必要であるが、後世には安売りされるようになり、スマトラ島やカリマンタン島等各地の領主もスルタンを名乗るようになった。しかしジャワでスルタンとはスルタン・アグンのことであり、スルタン・アグンの王系でスルタンの称号を継承するジョグジャカルタ家(→253)の当主ことである。

スルタン・アグンの本質はジャワ島の内陸部の農業圏から出てきた田舎領主の成上り王である。三河の土豪出の徳川家康と体質的に似ている。スルタン・アグンが東奔西走する膨張政策の目的は“米”を独占的に支配することであった。

マタラム王国の出自は農業国家であり商業や交易を軽んじる遺伝的体質があった。スルタン・アグン王の後継者はパシシル(→136)といわれるジャワ北岸の貿易商権からジャワ人を閉め出し、貢物と引き換えにジャワ島の貿易商権をオランダ東インド会社に売り渡した。

徳川政権も貿易を長崎に集中させ特定者に独占させた。貿易を為政者の私物化し外国に委ねてピンハネで自らが潤うという愚策はマタラム・徳川に共通している。

スルタン・アグンは 1646 年に死亡し、墓はイモギリ(→123)に築かれ、現在も参拝者が絶えない。後を継いだ子のアマンクラット 1 世はジャワ史上の有名な暗君である。

⇒250.新マタラム王朝

### 338. ラッフルズ英国副総督

東南アジアに名をはせた英国のラッフルズ(Thomas Stamford Raffles 1781-1826)はインドに着任した時は書記補にすぎなかった。ラッフルズはシンガポールの建設者として知られているが、東南アジアでの足跡はインドネシアが先行している。

ヨーロッパのナポレオン戦争に乗じて 1811 年にインドから派兵した蘭領東インドに攻め入りイギリスの支配下に入れた。計画の推進者であるラッフルズはジャワ副総督となったが、名目上のミントー総督はインドのカルカタに常駐しラッフルズに全てを任せただけで実質上のジャワの最高支配者であった。ラッフルズはオランダの略奪式経営を憎悪し、ジャワの税法、刑法の近代化を行う一方、ボロブドゥール遺跡の調査、新種の動植物の発見、ジャワ文物の調査に基づく大作『ジャワ誌』を記述した。

<sup>3</sup> 先にバンテン国王がスルタンの称号を得ていることを知り、1641年にイギリスの仲介でメッカから称号を得た。



戦後、ジャワ島はオランダに返還されたのでラッフルズの活躍はわずか4年であったが、その短い期間に多方面にわたり成果をあげ、多才の主であったことがうかがえる。しかしラッフルズは植民地行政の輝かしい名声は一方では嫉みから汚職の嫌疑を受け失意のもとに母国へ帰国した。ラッフルズの周りには信奉者と嫌悪者の両方<sup>4</sup>がいた。

彼の東南アジアへの情熱は止みがたく、再び、当時はイギリスの商館のあったスマトラ島西岸のブンクル(→099)副総督として戻った。ブンクルはジャワ島と比べるとあまりにも舞台が小さすぎたが、精力的にスマトラ島の探検調査を行った。植物では世界最大の花であるラフレシア(→053)を紹介した。その他の様々な学問的成果はまとめて積みこんだ船が火事で丸焼けになり、刊行を企てていた『スマトラ誌』は灰燼<sup>かいじん</sup>に帰した。

帝国主義者として秘かに行った謀略はオランダ支配下のマレー半島を調査してシンガポール島の地の戦略的価値を認め、独断専行で街を建設して1819年に開港したことである。その後、既成事実としてオランダは妥協を余儀なくされて、マレー半島は英国の植民地となり、今日のマレーシアに引き継がれた。

太平洋戦争に際して日本陸軍は植民地解放者であると騙り、英国帝国主義の悪口を吹聴して回った。しかしラッフルズ個人の悪口はあまりなかった。独断専行のやり口は関東軍の満州経営の手本であったからであろうか。

シンガポールには創建者ラッフルズの名のつく通、島、博物館、ホテルなどが溢れており、ラッフルズだけである。インドネシアにはラッフルズがジャワ副総督在任中になくなったオリビア夫人の記念碑が彼によって建設されたボゴール植物園(→114)の深い熱帯林の木立の中にひっそりと残されている。

ラッフルズはソフィアと再婚した。先妻・後妻のどちらも優れた女性であった。ラッフルズの死後、後妻がラッフルズの全記録を整理したが、その際にラッフルズに先妻は存在しなかったがごとく、先妻に関わる一切の記録が破棄されていた。波乱に満ちた生涯は毀誉褒貶<sup>きよほうへん</sup>がはなはだしく爵位が与えられる一方では会社の蒙った損害賠償が遺族に請求された。

⇒276.ラッフルズの支配 969.「ジャワ

誌」

### 339.ディポヌゴロ王子の反乱

19世紀初めのジャワ島はオランダの侵略で領土を蚕食されていたにもかかわらず、ジャワ宮廷は腐敗と陰謀に明け暮れていた。「ディポヌゴロ(Diponegoro)王子(1785-1855)」は少年時代からジャワの現状を憂え、この事態においてもなす術のない宮廷を嫌ってイスラム寄宿学校に住み、むしろ民衆との接触を好んだ。



ディポヌゴロ王子

ディポヌゴロ王子はジョグジャカルタ王家(→252)のスルタン・ハムンクブウォノ3世の長男であるが、母親の身分が低かったためスルタン位を継承できなかった。王子はジョグジャカルタを離れたトゥガルジョ(Tegarejo)で祖母に育てられた。

ジャワの現状を何とかしたいという願望に苦しむ中で、ある日、神からの啓示を受けた。サルタナ(Sarutana)という魔法の矢を雷光に見た。「今こそ立ち上がれ！」というラトゥ・アディル(Ratu Adil)の導き<sup>5</sup>である。

<sup>4</sup> ラッフルズは英国の敵であるナポレオンを尊敬しており、ジャワから英国への航海の帰途にセントヘレナ島に立ち寄り流刑中のナポレオンを見舞った。

<sup>5</sup> ラトゥ・アディルは Jaman Edan という末世に現れて正義が栄え、悪徳が減る理想社会を築くことをジョヨボヨ王が予言した。

ラトゥ・アディルは末世に現れる正義の神としてジャワ人が信じている。まさに当時のジャワは外国に食物にされていた末世であった。やがて王子自らラトゥ・アディルであることを名乗り、苦しんでいたジャワ人に神と崇められた。

オランダに対する叛乱の直接の動機となったのは道路用地のため王子の所有地が断りもなく取り上げられたことであるが、王位継承の不満も否定できない。オランダは王位継承に関与しオランダに従順な者が継承した。

1825年7月オランダに対する王子の叛乱は王族、貴族のみならず民衆の支持を受け、中部・東部のジャワ全土に拡大したことから“ジャワ戦争”と称される。しかし初めは王子を支援した王族や貴族はオランダに恫喝どうかつされて次第に陣営を離れた。

オランダ側の反撃体制の建て直しに伴い王子の率いる反乱軍は近代兵器によって次第に追い詰められ、最後はゲリラ化して戦った。

このディポヌゴロ王子の叛乱によるジャワ戦争はオランダに対するジャワ人の唯一の組織的抵抗であった。高貴な身分の出自であることは民衆の尊敬を集めた。この王子の下に従順といわれるジャワ人を率いる戦いはインドネシアの輝かしい歴史の一コマである。スカルノの率いるインドネシア国民党(→293)大会にはディポヌゴロの胸像があった。

120余年隔てた1948年12月18日、独立宣言以来3年を経過した独立戦争の最中にオランダは警察行動と称して空挺部隊を動員して当時の共和国の首都ジョグジャカルタを占領し、スカルノ大統領以下共和国の要人を捕えて連れ去る事件があった。

共和国の軍隊は散り散りとなり、独立戦争における最大の危機であった。しかし共和国の国軍の不退転の決意によって意気は挫けることなくオランダに抵抗した。近辺の農村に潜み森や洞窟に隠れるインドネシア軍にとっての勇気づけはこの近辺がディポヌゴロの故事、由縁の地であることであった。いわばディポヌゴロによってゲリラ同様の国軍のモラル(士気)は保たれた。

⇒277.ジャワ戦争

### 340. ディポヌゴロ王子の余生

オランダの植民地支配に対するジャワ人の唯一の組織的抵抗である1825-30年の「ジャワ戦争」は「ディポヌゴロ戦争」ともいわれる。ディポヌゴロ王子がオランダの植民地支配に反抗して立ち上がった時は40歳であり青年ではない。王子は反乱軍の首領<sup>6</sup>であるが、瞑想にふけているだけで実際の戦闘はストット<sup>7</sup>や家臣が取り仕切った。

当初は貴族やイスラム教指導者の支持をえて勢いに乗りジャワ島の大半を収めたが、オランダの反撃に次第に有力な部下を失い反乱軍は弱体化した。オランダは王子の首に巨額の懸賞金をかけたが、王子を離れ

初めはイスラム教指導者であるキヤイ・モジョなど名あるキヤイがディポヌゴロに組した。後に離反したのはディポヌゴロの宗教的権威がイスラムに取って代わるのを恐れたからである。

<sup>6</sup> 首都ジャカルタのムルデカ広場のモナスの前の芝生の中のプロムナードに仰ぎ見るような大きな一つの騎馬像がある。ディポヌゴロ王子の像として最も相応しい場所といえる。もっとも文人の王子は本当にはこのような凛々しい乗馬姿はありえたとはいえない。ディポヌゴロ王子の騎馬像はマゲラン博物館、ディポヌゴロ大学など各地にある。

<sup>7</sup> ストット(Sentot)はマディウンのブバティの子、ディポヌゴロの軍に参加し反乱軍の総指揮をとった。戦闘で負傷しオランダ軍にくたり、外島の戦闘にオランダ軍に加わった。

る部下はあっても懸賞金に目をくらまされるジャワ人はいなかった。万策つきた際にオランダの和平の呼び掛けに単身でノコノコと出かけた王子はマグランで捕えられてジャワ戦争は終結した。インドネシア人はオランダのだまし討ちの策略<sup>8</sup>であると信じている。

ジャカルタ歴史博物館であったと思うが、バタビアに連行されたディポヌゴロ王子をラデン・サレーが描いた油絵が非常に印象的である。重々しい警護の中で王子が中央に毅然としている様は光背を発するばかりである。まわりには王子を崇める民衆がうずくまって取り囲んでいる。この絵の場面設定に思い当たるのは捕われて十字架へ引きたてられるキリスト像の西洋絵画である。ジャワ人にとってディポヌゴロ王子は西洋人にとってのキリストに匹敵する存在である。

謀反人であってもオランダは王子の神がかり的人気を恐れて処刑できず、最初はスラウェシ島のマナド(→208)に流刑にし、後にウジュン・パンダン(→200)に移した。その後もオランダに反抗するジャワ人の間でディポヌゴロの名がささやかれていたため、ジョグジャカルタにいたディポヌゴロの息子 3 名はマルク諸島に流刑に処せられた。

70 歳と長命であったが、神秘主義者(→707)として禁欲と瞑想にあけくれた終生であり、著作に『ディポヌゴロ物語』がある。かつてオランダの皇太子がディポヌゴロに面会し感銘を受けたという挿話が伝えられている。ウジュン・パンダンにある墓は聖地としてインドネシア全土から訪れる人が絶えない。

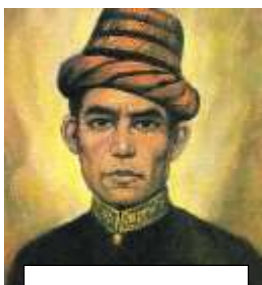
戦いのあった中部ジャワの農村では村落共同体の絆として特定の個人の墓が村の連帯の精神的より所となっている。その墓の多くはディポヌゴロ戦争の故事に関係づけられている。ディポヌゴロ王子の反乱によるジャワ戦争はジャワ農民に 20 万人の犠牲を強いたにもかかわらずディポヌゴロ信仰は厚い。

ジョグジャカルタ郊外のトゥガルジョには王子の遺品を集めたディポヌゴロ博物館<sup>9</sup>がある。ディポヌゴロが王子時代の屋敷があった所である。愛用した椅子には反乱の前に王子が怒りのため爪でつけたという傷跡が残っている。

スハルト大統領の出身の中部ジャワ師団「ディポロネゴロ師団」の命名の由来でもある。「ディポヌゴロ大学」はスマランにある国立大学である。

⇒277.ジャワ戦争

### 341. 女傑チュツ・ニャ・ディン



テウク・ウマル

西海岸ムラボー (Meulaboh) 出身の有力貴族であるテウク・ウマル (Teuku Umar 1854-99) は 30 年にわたりオランダを引きずり込んだアチェ戦争の指導者である。軍事的才能によって第一次アチェ戦争でオランダを苦しめた。しかし貴族出の彼は「闘争か死か」というチック・ディ・ティロ (Cik Di Tiro) のような観念的な神学者とは距離をおいていた。

オランダの勢力がアチェに浸透するのを時勢と見てトゥク・ウマルは 1893 年にオランダ軍に投降した。抵抗を続けるアチェ人からは裏切り者として罵られたが、その彼を支えたのは妻の「チュツ・ニャ・ディン (Tjot Nja' Dhien)」である。

<sup>8</sup> 1961 年、スカルノ大統領は西イリアン奪回を宣言するトリコラ演説において、オランダの主張するパプア国の提唱に対して、マゲランのディポヌゴロ王子の逮捕の史実をもとにオランダがいかに欺瞞を行ってきたかという実例として国民に訴えた。

<sup>9</sup> ディポヌゴロ博物館はジョグジャカルタ以外にマゲランとスマランにもある。





チュッ・ニャ・ディ

チュッ・ニャ・ディンは貴族の出であり、一族はオランダとの戦いに参加した。最初の夫のテウク・イブラヒム・ラムガはアチェ軍を率いてオランダと戦い 1878 年に戦死した。彼女は夫に代り、しばらくは戦争の指揮をとった。その彼女がオランダとの戦争を続けるために再婚した相手がトゥク・ウマールであった。

オランダに投降したトゥク・ウマールは時間をかせいで機会を待った。妻の説得に応じ、1896 年に大量の兵器を持ったままオランダに反旗を翻しアチェ戦争は再開された。

しかし汽船、鉄道によって補給を整え近代兵器で武装したオランダ軍に対して反乱軍は苦戦を強いられ、3年後にトゥク・ウマールは戦死した。その後は妻のチュッ・ニャ・ディンが反乱の指導者の地位を引き継いだ。

しかし、その後の戦いは戦争というよりはオランダの一方的な掃討戦であった。オランダの策略により反乱軍への支援者は次第に減っていく。神出鬼没によるゲリラ戦による抵抗も次第に包囲されてアラス溪谷(→085)に追い込まれる。

彼女は自らの戦いをキリスト教という異教徒に対するジハード(聖戦)とした。民族闘争から宗教戦争の色彩を帯びるにつれ、死を怖れない狂信者の殉教の戦いとなった。狂信者に対するオランダの掃討戦に容赦はなかった。

ジャングルの中の隠れ家は襲われ、女や子供にまでオランダ軍は狂気のように発砲する。累々と積み重なるようにして横たわる農民兵の死骸を舞台装置にしてフラッシュの閃光の下に記念写真がとられる。アチェ戦争の歴史の記述にしばしば引用される写真にはオランダの軍服を着けていても個々に顔をよく見ると大多数はアンボン人(→622)やマナド人(→620)の傭兵でオランダ人らしき者は少ない。

目を悪くし健康の衰えたチュッ・ニャ・ディンを見るに見かねた腹心は彼女を保養させる条件で隠れ場所を告げ、ついに 1904 年に捕えられる。チュッ・ニャ・ディンはこの裏切りを許さず、自ら腹心を刺し殺す。映画『チュッ・ニャ・ディン』(→994)の乞食さながらの格好の老婆に“後光”を見たオランダ人の将校が脱帽するシーンが印象的であった。

彼女は西部ジャワのスメダンに送られて 1908 年に死亡する。彼女の娘が夫とともに母の意志を引き継ぎオランダに対して立ち上がり、1910 年に戦死した。

⇒281.アチェ戦争

### 342. カルティニ/ジャワの才女



カルティニ

かつてインドネシアの最高額紙幣である「一万ルピア札」の人物像はカルティニ(Kartini)<sup>10</sup>という女性であった。25 歳の若さでなくなったが、お札の肖像になるほどのインドネシア歴史上の偉大な存在である。その後「一万ルピア札」はチュッ・ニャ・ディン(→341)に入れ替わった。

カルティニの家系はマジヤパヒトにまで遡るジャワの名門である。祖父のチョンドロネゴロ4世は開明貴族として知られ、積極的にオランダの生活様式を導入した。

<sup>10</sup> カルティニのフルネームはラデン・アジェン・カルティニ(Raden Ajeng Kartini)である。ラデンは貴族の称号である。

オランダから家庭教師を招き子供にオランダ語とヨーロッパの作法を身につけさせた。

父のソスロングラットは中部ジャワのジャワ海に面するジュバラ県(→136)知事であったため彼女はジュバラの知事官邸で育った。父には二人の妻がいてカルティニの生母はシラという平民であり 8 人の子供のうちカルティニはその5番目である。正妻の子供が 3 人で計 11 名の兄弟姉妹である。

正腹・妾腹関係なく育てられたようで、年代の近い異腹の妹二人と仲が良く、後にカルティニ三姉妹と呼ばれた。学齢期にはオランダ語学校に入る。いかに知事の娘といえどジャワ人の女子がオランダ語学校に入るのは稀有なことであった。

彼女はオランダ学校で西洋文化に触れてジャワの後進性を意識した。イスラム教の認めている四人妻への憎悪は宗教そのものを「人々は宗教の名においていくたびか罪悪を犯したことでしょう」と激しく否定した。女性解放のために教育による女性自身の自覚を説いた。彼女は親西欧の父をも越えて進もうとした。

優秀な原住民の娘がいるということで彼女の存在はオランダ人の間に評判になった。子供のないオランダ人夫妻に可愛がられ、やがてオランダ語を自由に使いこなすオランダの知識人と文通を行った。

しかしジャワ貴族の娘の例にもれず彼女も年頃になると“婚前閉居”といって一旦は家の中に閉じ込められたが、この間もオランダ語書物の読書に励み、結果的には充電期となった。やがて閉居を終えて人前に現われたが、このような行動はその時代のジャワ人の慣習から突出しており保守的なジャワ貴族層の輿論をかっした。一方、出来の悪いオランダ人からは原住民の跳ね上がりで憎悪された。

時あたかもオランダが倫理主義政策(→283)を唱えはじめた時期であり、ヨーロッパ本国や植民地政庁の有力ポストに進歩的オランダ人が進出していた。勢い彼女が物をいう相手もこれらのオランダ人の有識者であり、これらのオランダ人によって彼女の真価が認められた。

カルティニはジャワを逃れてオランダに留学しようとしたが、壁は余りにも大きかった。丁度その頃話のあったランバン知事の後妻口の結婚に同意した。オランダ留学経験のある夫に期待した結婚であったが、まもなく普通のジャワ男性であることに幻滅を味わった。

⇒973.「光は暗闇を越えて」

### 343. カルティニの挫折

カルティニの誕生日の 4 月 21 日はインドネシアの日である。女性のための様々な催しが行われる。この結果、カルティニの誕生日には女性が家事を行わない慣習が定着して、亭主が困っていることはさておいてカルティニなしでインドネシアの女性問題を語ることはできない。

インドネシアではカルティニと名のつく私立女学校が各地にあり、女性雑誌の誌名も『KARTINI』である。インドネシア映画の大作『カルティニ』がある。彼女を称える『イブ・キタ・カルティニ(我母カルティニ)』という美しいメロディもある。ちなみにジャカルタのディポヌゴロ通のカルティニ像は日本の寄贈である。生地の中部ジャワのジュバラ(→136)にはカルティニ博物館があり、彼女の遺品が展示されている。

ジャワの女性は性差別と植民地の被支配者という二つのしがらみの下にいた。開明貴族の家庭といえど女子にとってはジャワのしがらみは大きかった。民族の目覚めと植民地解放をうたうものの、“民族”とか“祖国”の概念が外の言葉(オランダ語)を通して発見され、支配者の言葉で表現せざるをえないという二律背反にあった。西洋教育を受けた民族主義先覚者のジレンマである。

当初の彼女はいわゆる単純な西洋カブレであったという自覚とともに、次第にジャワの伝統文化にも親し

むようになった。ジャワの土壤にしっかりと根を下ろし、自らもバティック(→926)を製作するジャワ文化の担い手となった。

ジャワ的なものよりもオランダ流のものが多くわたしの心情を占めている、と世間の人々は口ぐせのように申します。こんな風に見られるとはなんて悲しいことでしょう！たとえ身の内にヨーロッパの思想や感覚が宿されていようと一全身にいきいきと熱く流れる血潮、このジャワの血は決して消え失せるものではございません。ガムランの楽の音が響くとき、そよ風が椰子の芽を撫でるとき、鳩がクークーと鳴き、稲の穂がサラサラと鳴り、米をつく臼の響きが流れるとき、身の内にまざまざとそれを感じるのです。

と手紙に記しているように彼女の25歳の短い生涯における思想の遍歴の帰着するところはジャワであった。ジャワ人としてのアイデンティティに基づく思想は、やがて澎湃<sup>ほうはい</sup>として起きる民族意識の先駆けであった。

ヨーロッパ留学の断念、縮小を呑まざるをえなかった女子学校の開校、不本意な結婚、出産4日目の突然の死去とあまりにも短い悲劇的な生涯であった。しかし《19世紀》と《20世紀》の時代の狭間<sup>はざま</sup>を、〈ジャワ=東洋〉と〈オランダ=西洋〉の二つの世界にかけて精一杯生き抜いたといえる。

死後、オランダ人によって発表された彼女の書簡集『光は暗闇を越えて(→973)』は発表とともに世界の人々に感銘を与えた。植民地の原住民、しかも女性といえどヨーロッパ人の知性を上回るという証明であった。

⇒285.民族主義の芽生え

### 344. 政府認定国家英雄

ジャカルタの主要な“通り(Jalan)”にはインドネシアの歴史上の偉人が登場する。従って「通り」の名前を調べるとインドネシア史に強くなる。



例えばジャカルタのメイン・ストリートのタムリン通(→160)は独立を見ずに亡くなった民族主義者のタムリンの名である。タムリン通の南に延長されたスディルマン通は病身をおして独立戦争を指揮し独立を勝ち取ったスディルマン将軍の名にちなむ。ディポヌゴロ通りもイマム・ボンジョル通りもある。

ところで現在のジャカルタの中心は黄金の三角地帯といわれる地域である。その一辺をなす東西の幹線はガトット・スプロト通りでガトット・スプロト将軍(Jendral TNI An. Gatot Subroto)にちなむ。経歴<sup>11</sup>を調べるとただの軍人である。何故この人が英雄なのか分らない。勘ぐるに彼はスハルト大統領が軍人時代の上司であった。

スハルト将軍はディポヌゴロ師団長時代に金銭に関して<sup>かんば</sup>芳しからぬ行為のため国軍中枢から批判され左遷された。その際、軍中央で唯一人スハルトを擁護したのがガトット・スブ

<sup>11</sup> ガトット・スプロトの経歴は1907年中部ジャワ バニユマスで生まれ、オランダの HIS、マゲランの軍事学校を卒業、オランダの植民地軍(KNIL)に入隊、日本占領時代はボゴールのペタ独立義勇軍の中団長に、独立宣言後に創設された共和国軍に参じた。1948年マディウンの共産党反乱事件後スラカルタの州知事となり治安を守った。その後ディポネゴロ軍管区司令官に上ったが1952年の反乱に連座したこともあり辞任した。その3年後呼ばれて陸軍副参謀長となった。インドネシア国軍士官学校の創設に尽力したとされる。62年に死亡、1週間後独立英雄(Pahlawan Pembela Kemerdekaan)が贈られた。⇒HP「ジャカルタ新旧あれこれ」

ロト将軍である。汚職の噂が絶えず軍の中枢からマークされていたスハルト将軍にとってガトット・スブプロト将軍は奇特な庇護者であった。またガトット・スブプロト将軍はチュコン(→491)として悪名高いボブ・ハッサン(→681)の養父であることで知られている。

その後、ひょんなことからスハルトは大統領になった。その御礼かあるいはボブ・ハッサンの献金の威光でつけられたのが幹線道路の命名だろう。ガトット・スブプロト将軍はスハルトにとって恩人かもしれないが、本当に国家英雄に値する人であったのだろうか。

英雄の名にちなむ命名は大学、師団名、飛行場名にも見られる。紙幣も国家英雄の肖像である。スハルト大統領在任中に最高紙幣“5万ルピア紙幣”が発行された。多分、国家英雄を先取りしたスハルトの肖像であった。不名誉な退任に伴いスハルト紙幣も退任した。使用期間が短く急いで回収したため希少価値が出てマニアの間では額面の5万ルピア以上で取引されているらしい。

民族主義運動の英雄、独立戦争の英雄を国家英雄とすることを 1959 年に大統領布告で定めて以来、1975 年までに 84 名が指名された。内 20 数名については国家英雄の副読本があり、学校で生涯と功績が教えられる。

インドネシア英雄の最高位はインドネシア独立を実現したスカルノ大統領であろう。しかしスカルノ政権を否定する政体として発足したスハルト政権にとってスカルノ大統領の英雄認定は容易ではなかった。スハルト大統領が完成間近の首都空港にスカルノ大統領の名前をつけた時は大ニュースになった。続いて 1987 年にスカルノ大統領を国家英雄に認定した。スカルノ政権を認めたのではなく、“独立の父”として独立宣言を行った功績を認めたものでスカルノ大統領とハッタ副大統領はセットである。

国家英雄に故ティエン・スハルト大統領夫人(→451)も列挙されている。コメントする気力もなくなる。